

知求会ニュース

2016年05月

第58号

◎ 博士前期課程、入学おめでとうございます！

2016年4月8日(金曜日)午後3時から国際学部大会議室にて、2016年度オリエンテーションが開催されました。学長からの新入生へのメッセージは宇都宮大学 HP (アドレスは以下参照)に、掲載されています。

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/important/2016/04/003546.php>

今年度の入学者は、国際社会研究専攻の第18期生 応 惟雅さん、大手稔也さん、孔 凡旭さん、嶋田 望さん、趙 経超さん、渡邊 岳さん、渡邊裕介さんの7名と国際文化研究専攻の第18期生 東 克哉さん、JERDNAPAPUN CHITCHANOK さん、太 雪海さん、DU JING さん、湯 鈺茜さん、涸 静思さん、李 爽さんの7名、そして、国際交流研究専攻の第13期生青柳正樹さん、井田 綾さん、川島 賢さん、金 麟さん、高 岩さん、シンカーオ ワーシニーさん、SUDIP DAHAL さん、仙波美弥子さん、孫 斌さん、高階悠輔さん、DAO YEN LINH さん、晁 增艶さん、増山貴子さん、孟 楊さん、余 想さん、駱 蓉さんの17名で、計31名でした。

◎ 博士後期課程、入学おめでとうございます！

今春宇都宮大学大学院 国際学研究科博士後期課程に入学した趙 美慧さん(国際交流研究専攻・第12期生)、BRAVO KOHATSU JOSE RAUL さん(国際交流研究専攻・第12期生)、そして、鄭 名君さん進学おめでとうございます。今後の研究成果に期待したいと思います。(博士録36その1と知求会ニュース第59号博士録36その2を参照)

◎ 国際学部だより

1. UU now39号(平成28年4月20日発行)3面に、「特集1 新入生入学おめでとう！」の中で「「グローバル社会に対応できる能力」を身に付ける」と題して、田巻松雄学部長のコメントが掲載されました。http://www.utsunomiya-u.ac.jp/docs/uunow39_2-3.pdf
2. UU now39号(平成28年4月20日発行)10面に、Welcome to 授業「国際学部 学術英語購読」と題して、米山正文先生と飯山ももこさん(国際文化学科4年)、伏田真季さん(国際文化学科2年)、長谷沙樹さん(国際社会学科2年)らのコメントが掲載されました。
http://www.utsunomiya-u.ac.jp/docs/uunow39_10-11.pdf
3. UU now39号(平成28年4月20日発行)4面に、吉田 香さん(国際社会学科2年)が「宇大生の1日」と題して峰キャンパスの先輩事例の代表として紹介されました。
http://www.utsunomiya-u.ac.jp/docs/uunow39_4-5.pdf

○刊行案内

1. 国際学部と国際学部附属多文化公共圏センターより3月下旬に、多文化公共圏センター年報第8号215頁が刊行されました。目次を以下に記します。(敬称略)

はじめに

渡邊直樹

巻頭エッセイ 「インターネットと公共圏」

倪 永茂

I 論文・報告等

投稿論文

「宇都宮はどのように紅茶を活かせるのか？」

ー日本における紅茶を通じた市民活動から見る宇都宮・栃木の可能性ー 栗原俊輔

「カンボジアの格差・貧困問題に関する考察

ー「新しい貧困の罨」からの脱出は可能かー 重田康博

「有島武郎と朝鮮メディア ー情死事件を手掛かりとしてー」

丁 貴連

「公共性の成立と言語 18世紀ドイツの〈言語協会〉」

渡邊直樹

「韓国における外国人児童生徒の教育の現状と課題」

金 英花

「日本語と中国語における空間辞の使用に関する研究

ー参照枠の選択の視点からー 趙 無忌

「持続可能な人道支援のためのマルチラテラル・ネットワークの構築を目指して

ーフィリピンの HAVEN (安息の地) への支援を事例としてー 仲田和正

「第二言語としての日本語の連語習得について」

方 小賛

研究ノート

「国際理解における言語活動の諸相：

母語、第二言語、国際語としての英語の視点から」 佐々木一隆

「宇都宮市民のフェアトレードに対する意識調査」

重田康博・倪 永茂

「スポーツ行政における国際交流・国際貢献

ースポーツ庁の事業を手掛かりとしてー 中村祐司

II 活動報告

- 1 連続市民講座 VOL.10 「水俣から照らすー原発災害と足尾銅山鉍毒事件」
- 2 第5回 かぬま多文化共生講座「はじめの一步」(2015年開催報告)
- 3 第7回 グローバル教育セミナー「アジアにおける社会起業とグローバル教育」
- 4 益子プロジェクト報告
- 5 <シンポジウム> ーNIKKO 世界遺産+1! ーグローバル時代のツーリズムー
- 6 宇都宮大学 HANDS プロジェクト 2015年活動報告
- 7 「福島原発震災に関する研究フォーラム」概要と本年度の活動報告
- 8 福島県幼児妊産婦支援プロジェクトのスタッフ業務を振り返って
- 9 スタディツアー報告「足尾・渡良瀬河流域ツアーから学ぶ足尾鉍毒事件の構造」
- 10 FnnnP 栃木 Jr.活動報告 証言集読み合せ会

- 11 研究会報告「とちぎ暮らし応援会による広域避難者支援の取組み」
- 12 「栃木避難者母の会」活動の記録 ―避難先の出会いに支えられて―

IV 関連資料

- 1 センター組織と活動記録
- 2 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報発行要綱
- 3 多文化公共圏センター関連 新聞記事

研究室訪問 46 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 46 号は執筆者が未決定のため未掲載になります。

博士録 36 その 1 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 36 回目には新入生の皆さんにお願いしました。

- ①氏名：**ブラボ コハツ ホセ ラウル** (*Jose Raul BRAVO KOHATSU*)
- ②出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程 国際交流研究専攻
- ③専門：国際交流研究（博士前期課程）、国際学研究（博士後期課程）
- ④指導教官：田巻松雄教授
- ⑤趣味：三線（練習中）
- ⑥研究テーマ：在日ペルー人の文化変容
- ⑦自己紹介：私は、宇都宮大学に 3 年次編入した 2012 年から 4 年間にわたりお世話になり、今後の 3 年間も学術的な側面をもって関係を深めていくことになる。ペルーで生まれ、幼少期から日本で育ってきた外国にルーツのある 1 人として今後どのように学問的に地域や日本社会に貢献できるか不安な部分が多々あるが、宇都宮大学の学部・博士前期課程で獲得できた土台と日本・ペルーで培った経験をもとに邁進していきたいと考えている。

（2016 年 04 月 01 日原稿受理）

- ①氏名：**趙 美慧** (*ZHAO Meihui*)

- ④指導教官：磯谷玲教授

次号掲載予定

- ①氏名：**鄭 安君** (*CHENG An-chun*)

- ②出身大学院：白鷗大学大学院 経営学研究科 経営学専攻（修士課程）
- ③専門：外国人雇用とダイバーシティ、東アジア社会と人的移動、幼児教育学
- ④指導教官：田巻松雄教授
- ⑤趣味：ミュージカル鑑賞、旅行
- ⑥研究テーマ：国際移動と多文化社会の経営および展望～台湾の婚姻移民と移住労働者を中心に～

⑦自己紹介：栃木県民歴が 20 年の台湾人です。栃木での暮らしもあと少しで故郷よりも長くなります。賑やかな台北の屋台での B 級グルメ堪能は私にとって最高の贅沢ではありますが、静かに思川桜を見上げながらでのおにぎりとおとめの味も捨てがたい幸福です。

仕事をしながらの博士後期課程への入学は自分の人生にとって大きなチャレンジになります。ドキドキしながらもワクワクしています。研究テーマは台湾にいる外国人が中心になりますが、自分の外国人経験も活かし、台湾にも日本にも役に立つ研究ができるように頑張っていきたいと思います。

(2016 年 04 月 14 日原稿受理)

博士録 37 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 37 回目には佐々木一隆研究室 OB の趙無忌さんをお願いしました。

認知言語学から見た日中空間辞の意味と機能拡張に関する比較研究

趙 無忌

1. 博士論文の概要

空間表現とは、人間が外部の世界を把握し、そこから得られた経験を言語で示したものです。本論文では、日本語における「上(うえ)」、「下(した)」、「前(まえ)」、「先(さき)」、「後(あと)」という 5 つの空間辞と、中国語における「上(shang)」、「下(xia)」、「前(qian)」、「後(hou)」という 4 つの空間辞を研究対象にして、それぞれの意味と機能を考察し、比較しました。

本論文は序章と終章を含めて全部で 6 章からなります。以下に、第 1 章からの内容を概観します。序章では、本論文における研究の背景、研究の対象、研究の目的、認知言語学の重要な用語及び本論文の構成について説明しました。

第 1 章では、日本語の「上(うえ)」と中国語の「上(shang)」という 2 つの空間辞の意味と機能を比較しました。まず第 1 節では問題の提起と本章の目的を述べ、第 2 節では、「上(うえ)」と「上(shang)」に関する先行研究を整理して、語彙的な意味と機能的な意味との連続性を紹介しました。第 3 節では、「上(うえ)」の各種類の空間的な意味を分析し、物と物との位置関係から事柄と事柄との抽象的な関係へというメタファーによる拡張のプロセスを取り上げ、「上(うえ)」の機能を考察しました。第 4 節では、空間的な意味を分析し、接触ありの高所から存在の場所へというメトニミーによる拡張のプロセスを取り上げ、「上(shang)」の「場所化」という機能を検討しました。第 5 節では、「上(うえ)」と「上(shang)」との用法の相違点と共通点を明らかにしました。例えば、「上(うえ)」と「上(shang)」のいずれも、一方の物がもう一方の物の上部にあるという「接触ありの高所」の用法があります。しかし、「上(うえ)」は物から事へのメタファーによる拡張を通して語義が抽象化し、「成績優秀なうえ、スポーツもよくできる」という「添加関係」の用法を持つようになりますが、中国語の場合では「添加関係」は「上(shang)」のかわりに通常他の

表現で示すのが一般的です。また、「上(shang)」は物と物が物と場所へと転換するメトニミーを介して、「牆上有一個孔（壁に穴が1つ空いている）」のような「垂直面の場所化」の用法を持つようになりますが、この場面では「上(うえ)」の使用が大きく制限されていません。

第2章では、日本語の「下(した)」と中国語の「下(xia)」という2つの空間辞を比較しました。第1節では、「下(した)」と「下(xia)」との比較研究が現時点では極めて稀だという研究の状況を浮き彫りにしたうえで、本章の目的を述べ、第2節では、「下(した)」と「下(xia)」のそれぞれの空間的な意味を分析しました。第3節では、拡張のプロセスを通して、「下(した)」と「下(xia)」との共通の非空間的な意味をまとめ、第4節では、スキーマ変換という認知の現象を取り上げ、「下(した)」の非空間的な機能の特徴を分析しました。また、「メトニミーからのメタファー」という拡張の現象を取り上げ、「下(した)」と対応しない場合の「下(xia)」の用法を考察しました。例えば、「太陽下」、「監視下」、「方針下」といった中国語の表現における「下(xia)」は、日本語では「下(した)」による対応が困難であり、「下(した)」のかわりに「下(もと)」で示すのが一般的です。

第3章では、日本語の「前(まえ)」・「先(さき)」と中国語の「前(qian)」という3つの空間辞の意味と機能を比較しました。まず第1節では、本章全体に関わる問題提起と本章の目的を述べました。第2節では空間的参照枠などの概念を紹介して、「前(まえ)」・「先(さき)」、「前(qian)」の空間的な意味を考察し、第3節で「前(まえ)」と「前(qian)」、「先(さき)」と「前(qian)」との空間的な意味の相違点を明らかにしました。第4節では時間メタファー理論の変遷を概観し、主体性という概念も加味しながら、本論文の新たな分類方法を説明して、第5節で3者の時間的な意味を比較しました。例えば、日本語の「先(さき)」は、「修論諮問は、修論提出のまだその先だよ。」という例から分かるように、**Later** という時間的な意味を持ちますが、中国語の「前(qian)」にはこのような用法がありません。

第4章では、日本語の「後(あと)」と中国語の「後(hou)」を分析対象にして、両者を意味と機能の拡張の観点から比較しました。第1節では研究の背景を説明し、本章の目的を述べました。第2節では、「跡(あと)」という日本語の表現に対する考察を含め、「後(あと)」と「後(hou)」との空間的な意味を記述したうえで、両者の違いを分析しました。第3節では、時間メタファーに対する本論文の新たな分類に基づき、「後(あと)」と「後(hou)」の時間的な意味の相違点を明らかにしました。例えば、「後3人が座れる」、「修学旅行まで後2週間」といった表現における「後(あと)」は、残った空間または時間を示していますが、このような場合では中国語の「後(hou)」の使用が難しくなります。

終章では、この論文で論じられた日中両言語の空間辞の意味と機能拡張の異同について明らかになったことを章ごとにまとめ、また、今後の課題を展望しました。

2. 感謝

本論文の執筆にあたり、何よりも感謝せねばならないのは、始終温かくご指導を賜わり

ました指導教員の佐々木一隆先生です。テーマの着想から、論旨の組み立て、表現の推敲などに至るまで、佐々木先生の入念なご指導がなくては、本論文の完成は全く不可能であり、ご支援下さいましたことに衷心より厚くお礼申し上げます。学術雑誌へ論文を投稿する際にも、佐々木先生より多大なご助力をいただきました。

次に、博士後期課程に進学して以来、大変お世話になりました副指導教員の中村真先生、松村史紀先生に深甚なる謝意を申し上げます。また、本論文の審査及び修正にあたり、大変なご面倒をお掛けしました松金公正先生に心より厚くお礼申し上げます。本論文の審査をお引き受け下さった倪永茂先生に、厚く感謝の意を申し上げます。学外審査委員である東洋学園大学の高尾享幸先生からは、深い学識に基づく貴重なご指摘を多くいただき、この場を借りて深謝の意を申し上げます。

3.後輩への助言

博士号を取得したとはいえ、これから学位論文に取り組む後輩にアドバイスするのは大変恐縮です。分野ごとの特徴及び個人差がかなり大きいこともあります。あくまで1つの参考例として、3年前に国際学研究科博士後期課程に入学した時からの自分自身への3つの留意点という形で、過去を振り返りながら感想をまとめようと思います。

第一に、逆境から回復する力を鍛えることが大切です。難しい論文を読んで理解できないとき、一生懸命に書いた論文が掲載不可になってしまったとき、学会の研究発表で予想外の厳しい問いを投げかけられたとき、博論執筆が難航しているときなどでは、身に付けた知識と能力を信じ、できるだけ早く敗因を詳しく分析し、難題を解決する方向へ進めることが肝心です。

第二に、読むこと(インプット)と書くこと(アウトプット)とのバランスを取りながら、論文作成を進めるというやり方が重要です。先人の文献を読み、先行研究を深く広く調べることは、言うまでもなく博論の構想のうえで極めて重要なことですが、ある程度の時点で活動の重点を執筆に移さなければなりません。とは言うものの、論文の作成中の段階においても絶えずインプットを続けるという態度も不可欠です。

第三に、分野が異なっても他人の研究に対して興味を持つことが大事です。博士レベルの学生には自力で研究を実施する能力が求められ、自分ひとりで過ごす時間も過去と比べ非常に多くなります。とはいえ、同じ研究科にいる他の学生たちがやっていることに、一定の関心や注意を向ける必要があると思います。仲間たちとつながることによって、自分の知識を増やし、教養を高めるとともに、他の観点から自分の研究を見る目が養われます。

以上が私の感想です。この5年間、国際学研究科で研究生生活を送ることができて、本当によかったと思っています。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(国際学研究科 国際学研究専攻 第7期修了生)

(2016年3月30日原稿受理)

博士録 38 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 38 回目には丁研究室 OG の三成清香さんにお願ひしました。

「学生生活を終えて」

宇都宮大学大学院国際学研究科博士後期課程

三成 清香

1. 論文要旨

本研究は、ラフカディオ・ハーンという人物と彼の再話活動について迫ったものである。再話作品を分類すると、女性が物語の中核をなす、いわゆる「女性もの」が多くを占めていることに気づく。それは、ハーンが自らを「女性崇拜者」であるとし、アメリカ時代から女性についての文章を書き続けたこと、そして来日後も「女性」が一つの大きな関心であり続けたことを示している。

19 世紀を生きたハーンに注目する際に欠かすことのできない視点であるにも関わらず、これまでほとんど触れられてこなかったのは、ハーンと西洋諸国の社会的状況との関係である。とりわけ 1870 年代頃から興ったジャポニスムは、西洋に「日本女性」のイメージを強く与え続けた。1863 年から 1890 年までの間、イギリスとアメリカに過ごしたハーンもまた、ジャポニスムが与えた日本像から自由ではあり得なかった。

これまでのハーン研究に目を向けると、ハーンが日本人よりも日本を愛し、深く理解し、近代化に取り残されてしまった日本の風景や日本人の気質を拾い集め西洋に発信し続けた、として特別視するものが主流なものとして存在してきている。しかしながら、殊「女性」に関する描写については、ジャポニスムが与えたある種の幻想に取り憑かれていたハーンの姿も浮かび上がってくる。にも関わらず、こうしたハーンのある種の限界についてはこれまで多く注目されることはなく、ハーンの視点と業績を特別視しようとする傾向が大半であった。つまり、これまではハーンによって美しく描かれた日本の中に、西洋化と対峙するハーンの姿を見ようとする見方に偏っており、19 世紀を生き、その流れに乗じる形で日本を描き出していた可能性については、未だ十分に示されてきてはいない。

そこで本論文では、19 世紀という時代の中でハーンがいかにそれまでとは異なった作品を西洋へ発信しようとしたか、その意図を明らかにすることを目的とした。19 世紀という時代、そして想定された読者層について考慮しながら、再話作品とその原話を比較していき、「描き直し」の過程で強められた典型的日本女性のイメージの意義を浮き彫りにした。

第 I 部では新聞記事を題材にした比較的初期の作品を、第 II 部では近世の物語を原話とした晩年に近い時期に書かれたものを取り上げた。第 I 部で描かれた女性たちは、いずれもサムライの娘が主人公となっており、日本女性をエキゾチックな、得体の知れない者として描こうとすることに終始してしまつたハーンの姿が浮かび上がってきた。し

かし第Ⅱ部で扱った後期の作品には、「孝」や「貞」に生きる女性、「嫉妬、復讐」への執念を抱く女性といった前期には見られない多様な女性たちが登場するようになる。これらの作品について、原話と再話を比較し、当時の日本社会、風俗などを踏まえ論じることによって、再話の中に描きなおされた女性たちの持つ意義に迫ることで、来日前ジャポニスム文学に強く影響を受けたハーンが、来日後、心酔、絶望、覚醒といった実体験を経ることにより、いかに、それらと対峙する形で、新たな日本女性のイメージを提示し続けたかが明らかになった。それは、それまでのジャポニスムの流れによって構築された日本女性像への挑戦であり、現在もなお、多くの人々が一つのステレオタイプに集約しようとする「日本女性像」とは異質な、多様な生を生きる存在であることが分かった。重要なのは、ハーンは日本という一つの幻想に沸いた19世紀の西洋社会に生き、ジャポニスムの中で無視できない「日本女性」という存在に強く影響を受けながらも、それらに異を唱える形で「女性もの」を描くに至ったという事実であろう。本論文では、再話作品が描かれた背景だけではなく、再話作品が描かれるに至った背景と、発信先の背景といった、これまで見落とされがちだった部分にまで視野を広げることで、ハーンの女性描写が、西洋社会に蔓延する固定的なイメージを覆そうとする挑戦であったことを明らかにした。ハーンは、1904年9月すなわち日露戦争の真っ只中に急逝するが、晩年になると近世の物語にのみ注目し、再話活動を続けていった。そこには単に古き良き日本における「慎ましやかに男性に従う女性の姿」ではなく、むしろその対極にある存在、すなわち、社会の中で強く、思いを貫こうと生きる女性たちの姿が存在している。

現代を生きる私たちは、「女性もの」の女性たちを画一化された日本女性像の中に閉じ込めてしまうような読み方から脱し、いかに自由な、解放された生を生きる女性たちであったかを考えるべき段階に来ているのである。

2. 後輩の皆様へ

三成清香と申します。宇都宮大学教育学部に入学し、国際学部への転部、卒業、それから韓国での就労を経て、再び宇都宮大学の大学院へ入学し、修士課程、博士課程と、早10年以上が過ぎてしまいました。学生生活はあっという間で、とても充実したものでした。おそらく現在勉学に励んでいらっしゃる皆様も同じように感じられていることと思います。指導教員の先生方や周囲の学友に感謝しつつ、研究を深めていかれることを期待しております。

(国際学研究科 国際学研究専攻 第6期修了生)

(2016年3月11日原稿受理)

知究人 28 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。今回も予定の寄稿者から入稿がありませんでしたので、未掲載になります。

海外だより 22 第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。今回は寄稿者がいませんので未掲載になります。

海外留学今昔 17 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「中国留学体験記」

国際学部国際文化学科 4 年 飯山 ももこ

帰国後友人に会うと、よく上海留学の感想を聞かれました。私は決まって「実際に上海に居たのは 10 か月に満たなかったのに私にとっては 5 年くらいの密度があった。」と答えています。私は 2014 年 9 月から 2015 年 7 月まで中国の上海に交換留学に行きました。この留学は私にとって「楽しかった」だけでは片づけられない、しかし私の人生にとって重要なものとなりました。

私が留学を決めたきっかけは中国語に対する興味や、中国文化への憧れが大学留学前からあったからです。中国留学を通して日本のメディアや人づてに聞く中国のイメージと実際の比較、中国の研究を少しでも読むことを目標としていたため、留学前から中国語の学習には多くの時間を割いてきました。このように盤を持して中国留学の準備をしたにも関わらず、全てがうまくいったわけではありません。日本で読解、作文を中心に中国語を勉強し、上級レベルの語学の資格をとったにも関わらず、授業の初日、流暢に中国語を話すクラスメイトの会話の輪に入れずに落ち込んだことなどを思い出します。また、留学生と付き合いをする中で、適切な距離を保てず、一人で悩んだこともありました。

このように辛いこともあった留学ですが、得たものは大きく、この留学を通して得た一番大きな収穫は、自分の価値観が広がったことだと思っています。当たり前のことかもしれませんが、日本での常識は日本での常識に過ぎず、世界に通用する常識などはないことを、身を持って体験しました。例を挙げると、中国の女性は外に出るとき必ずしも化粧をしません。一方日本では女性が外に出る時は大多数の方が化粧をします。特に社会人として働いている女性は化粧をすることがほぼ必須であると言っていいと思います。化粧をすることが表す意味が中国と日本で違うため、このような差異が生まれるのかもしれませんが。私は中国人の学生と勉強をできる本科への入学を希望していましたが、結果的に留学生専用のクラスで学べたことは良かったと思っています。様々な国から来たクラスメイトと一緒に授業を受け、生活を共にすることで、様々な価値観に触れ、客観的に既存の自己の価値観を見つめることができたからです。常識はある限られた社会にしか通用しないと認識することは、対象を学問的に分析する一歩ではないでしょうか。この点で、この留学で得た視点はこれからの卒業研究にも生きると思っています。

最後になりましたが、留学に際して援助や助言をして下さった先生方や友人に感謝申し

上げます。少しでも、今後留学を考えている方の参考になれば幸いです。

(国際学部 国際文化学科 4年次在学学生)

(2015年12月04日原稿受理)

「香港と台湾は別です。」

国際学部国際文化学科4年 杉山 真柚

私が留学をする前、多くの友人に「すぎ、台湾留学頑張っ！」と言われた。それくらい友人にとって、1年間私がどこに行こうが関係のないことなのだろうと考えた、のではなく、香港という地が普通の日本人にとってあまり馴染みのないものであるのかもしれないと感じた。実際に私が初めて降り立った日の香港は、空気も匂いも景色も全然宇都宮とは異なるものだった。街中は、スーツを着た西洋人、上半身裸の香港人、大量の紙おむつを運ぶ中国人など様々で、聞こえてくる言語もその数だけ多様であった。初日は本当に、これから1年間住むことになる香港という地に、文字通り圧倒されただけであった。

しかし初日の不安に対して、月日が人生で一番早く過ぎたように感じた一年であった。毎日遊びと勉強に常に追われ続けたのは、これが初めてであった。アジアトップレベルの香港大学では、宇都宮大学にいた時には感じたことのない、諦めを超越した世界を見た。その量の課題を一応こなし、目の下にくまを作って向かったディスカッションでは、上手いことを発言できず、精神がズタボロになった。その反動、というわけではないが、放課後はほとんど毎日誰かと、香港のエキゾチックな夜の街へ繰り出した。日本では内向的な私は、こんなに同時にいろいろな人と交流することはなかった。それでもなぜだか疲れたと感じることはなかったのは、もしかすると留学マジックだったのかもしれない。もし内向的なことを理由に、留学をためらっている方がいれば、迷いなく行くべきであると思う。私でさえ留学マジックにかかったのだから。

大学での公用語である英語を使うにしても、話す相手が学識高い人たちであった。ディスカッション内だけではなく、日常会話から、学問的、政治的、経済的内容など、深い話を英語で振られることばかりであった。私が滞在中に、「雨傘革命」という学生デモが起こったこともあり、日本人としての意見を求められる機会も多かった。その度私は、自分の意見がないことに苦しみ、愛想笑いをしながら一般論を答えるのである。英語能力と同時に、専門知識や社会知識をもっと蓄える必要があると、刺激をうける日々であった。

現地ですぐできた友人はもちろん絶対的に香港人などの外国人の友達が多いのであるが、日本から来ていた留学生も非常に刺激的であった。香港大学にはその教育水準から、日本からは誰もが名を知る名門校から来ている。同世代であるのに私なんかよりはるかに知識を脳に蓄えている人間と対等に会話をしなくてはいけない環境であったことは、日本語を使うにしても有意義な使い方であったように感じる。

留学を通して私という存在が180度変わったとはいえないが、何かしら今の私に刺激を与えてくれたことは間違いない。フットワークが軽くなったこと。常識を身につけようと

新聞 twitter をフォローし始めたこと。英語力を伸ばす、外国人の友達を作る、といった誰もが浮かべる留学の目的とは別に、何か大切なものを得ることができた一年だったのではないかと思う。

(国際学部 国際文化学科 4年次在学学生)

(2015年11月05日原稿受理)

学生サロン 10 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南 12 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2016年の臯月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)今回は投稿者が見つかりませんでしたので、未掲載になります。

●お知らせ

第4回宇都宮大学ホームカミングデー開催日決定！ **2016年11月19日(土曜日)**
大学祭の「峰ヶ丘祭」開催期間中に開催します。詳細は後日改めてお知らせしますが、来校の予定を皆様の手帳にご記入のほどお願いします。

EU支部だより

第38号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の18号の内容は、1 イタリア万博後の跡地：MITから学ぶ新たなイタリアへの4プロジェクト 2 EU支部だより ー震災への思いーです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

●2016(平成28)年4月25日(月)午後2時から、栃木県総合文化センター サブホールにて、盛大に地域デザイン科学部開設記念式典が挙行されました。来賓には**下村博文**前文部科学大臣(衆議院議員)、**上野通子**元文部科学大臣政務官(参議院議員)、**常盤 豊**文部科学省高等教育局長、**福田富一**栃木県知事を迎えました。参加者は国会議員・文部科学省・栃木県関係で12名、市区町村長で23名、企業・団体・その他関係で101名、地域デザイン科学部教員41名、地域デザインセンター職員2名、地域デザイン科学部新入生151名(県外出身者7

割) でした。

次第は、三橋伸夫副学長による「開式の辞」と共に、熊本地震による犠牲者の方々へ黙とうを捧げました。次に、石田朋靖学長による「学長挨拶」がありました。内容は下記のHPからご覧ください。その後4氏の「来賓祝辞」がありました。そして、塚本純地域デザイン科学部長による「新学部設立経緯」説明があり、壇上に整列されて新学部を担う「教員紹介」がありました。また、151名の「新入生代表挨拶」が学科ごとの3名で力強く行われました。最後に、三橋伸夫副学長による「閉式の辞」で幕を閉じました。

地域デザイン科学部開設記念式典に関する情報：

(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/important/2016/04/003645.php>)

来賓スピーチで、上野通子参議院議員が提案された3C Actが気になりました。一つ目のCはコミュニケーション(Communication)、二つ目のCはチャンス(Chance)、三つ目のCはコネクト(Connect)でした。宇都宮大学の3C(Challenge/Change/Contribution)精神を行動に移すための指針です。ぜひ、この3C Actを取り入れて、大いなる目標に向かって持続的に前進していただきたいと思います。

●2016(平成28)年4月25日(月)午後4時から、東武ホテルグランデ 松柏にて、盛大に地域デザイン科学部開設記念祝賀会が開催されました。初めに、ゆるキャラの栃木県「とちまるくん」、宇都宮市「ミヤリー」、宇都宮大学「宇～太」たちが勢揃いし、「宇～太」から「とちまるくん」と「ミヤリー」に感謝のプレゼント贈呈がありました。本当に微笑ましい演出でした。

次第は以下の通りです。

学長挨拶	石田朋靖学長
来賓挨拶	佐藤栄一宇都宮市長
鏡開き	
来賓スピーチ	山本健慈国立大学協会専務理事
中締め	塚本純地域デザイン科学部長

編集後記：2010年4月26日から知求会ニュースのバックナンバーは国際学部同窓会HP(<http://www.afis.jp>)で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。chikyukai@freeml.com

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会